

私の太宰

その魅力

4

太宰ファンならずとも多くの人が知っているとお

う。「津軽」以外に、温泉や講演などに出かけた小説もあるけれど、伊豆、長野、山梨、新潟などの近場が多い。私の知るかぎり、太宰は外国どころか京都、大阪、名古屋にすら一度も足を運んだことがないはずだ。

もしかしたらアルバイト体験すらないのでなかろうか。もちろん医師でも弁護士でも教師でも農家でもなく、つまり作家以外の職業に就いたことがない。

それについて「赤貧洗つがごとし」といった貧乏生活に耐えていたわけでもなくて、小説で自活できるようにするまでは、大地主である生家からの仕送りで食べていた。

この実生活の「体験」の貧しさや乏しさは職業歴だけでは足りない。

たとえば旅行にしてもそ

ョンなどをしていたという話も聞かない。わずかに旧制弘高時代、義太夫に凝ったというが、それも本格的なものだったわけではなさそうだ。

もちろん体験が豊富で多趣味だからといって面白い小説が書けるといふものではないし、私もそんなことがいいたいのではない。

ただ、若いころから面白い小説を書くことだけを念願した人生だったとはいえず、また何度も繰り返された「自殺願望」の強い性格を考慮に入れてみたとしても、やはり相当に変わった内向きな人生だったと指摘しているだけである。

その結果、太宰の小説は、一部の寓話(ぐうわ)や歴史に題材を借りた作品をのぞけば、大半が、幼児期から青春にかけての回想と、東京の中央線沿線に住む本人をほつふつさせる中年作家の日常生活を舞台とせざ

From. 田澤拓也さん(4)

味吟を人生実しい乏

カット・津島園子



まるでタコが自分の足をしゃぶりつくすかのよう

に、太宰は、毎回さして代わり映えのしない自分の体験を、上から下から、右から左から、あれこれ味吟して描写する。

実は、太宰治がすごいのは、こうした実人生の持ち主でありながら、作品が、いわゆる私小説ではないという事実である。

私は昔から不思議に感じていたものだ。どうして太宰の小説は、いつも同じような舞台と主題なのに読者を飽きさせず、こんなに面白いのだろう、と。当然ながら、そこに小説家・太宰の「業」と「工夫」があるわけで、私が思うに、その特徴がもっともよく表れているのが太宰十八番の一人称による告白体なのである。(ノンフィクション作家)

るを得なかったのである。そして、そのいつも似たような舞台で追いもとめられ、掘り上げられていくメ